1999年 経済学者・経営学者・エコノミスト220人が選んだ 年間ベスト・オブ・経済書

読書特集

経済学者、経営学者、エコノミストへのアンケートによって、1999年（98年11月～99年10月発行）のもっとも優れた経済書を選定した。秀でた経済書は日本経済の眼前に横たわる問題を解き明かし、処方箋を与えてくれる。（本誌・小栗正嗣）

「一九九九年ベスト・オブ・経済書」ランキング上位の顔ぶれは、なにを物語っているか、ランキングを通してなにが透けて見えてくるか。本誌書評欄「今週の一冊」の評者である西村清彦・東京大学経済学部教授と北村行伸・一橋大学経済研究所助教授に語ってもらった。

☆

西村　九九年の特徴はなんといっても「分配」の問題が大きくクローズアップされたことでしょう。

九八年六月に惜しくも亡くなられた石川経夫さんの『分配の経済学』が一位、二位が『不平等の再検討』（アマルティア・セン著）、三位に『日本の経済格差』（橘木俊詔著）と三冊が並びました。九〇年代の最後にきて、分配、不平等、格差といったものをどう考えればいいのかが、大きなテーマになっていることは間違いありません。

北村　いずれも、このテーマを長い間ずっと追い続けてきた研究者の著作です。付け焼き刃の研究ではない。それが、ホームレスがこれだけ街に溢れる今日に至って評価を得た。

西村　それにしても、効率性の対極にある平等性というものに、かくも大きな関心が寄せられるのは日本の特色でしょうね。

北村　これまで不平等という結果を

気にせずに走ってきたが、ここにきて現実に分配の問題が生じてきたことで、揺り戻しがあった。

米国のようにひとりのスーパースターと一〇〇〇人の没落者を生む世界と、みんながそこそこのスターをめざす世界。いま、私たちはその分かれ道にいるのだと思います。

西村 私たち以上の世代は、分配の平等つまりは「努力すれば報われる。報われないのはおかしい」という世界に生きてきた。「あしたのジョー」の世界ですね。ただ、若い人たちはどうかな。おそらくジェネレーション・ギャップがあるのでは。

北村 若い世代は別にいいじゃないか、という感じなのかもしれません。

キーワードは不平等とグローバリズムへの疑念

西村 分配問題のほかには、グローバル経済への迷いも見て取れます。ポーターの『競争戦略論』（四位）や『ディジタル・エコノミー』（米国商務省著、七位）が上位にランクインするいっぽうで、ジョージ・ソロスの『グローバル資本主義の危機』（六位）や金子勝さんの『反グローバリズム』（二〇位）などが入っているのは、その迷いの証でしょう。

北村 ランキングの特徴といえば、上位に総論的なグランドデザインを語った著書が並んでいることもあげ

H. MAKI

ベスト・オブ・経済書 総合ランキング

1位(41点)	分配の経済学	石川経夫	東京大学出版会
2位(38)	不平等の再検討	アマルティア・セン	岩波書店
3位(36)	日本の経済格差	橘木俊詔	岩波新書
4位(25)	競争戦略論Ⅰ・Ⅱ	M・E・ポーター	ダイヤモンド社
5位(24)	会社法の経済学	三輪芳朗ほか編	東京大学出版会
6位(23)	グローバル資本主義の危機	ジョージ・ソロス	日本経済新聞社
7位(22)	ディジタル・エコノミー	米国商務省	東洋経済新報社
	反経済学	金子　勝	新書館
9位(19)	日本人の経済観念	武田晴人	岩波書店
	年金改革論	八田達夫、小口登良	日本経済新聞社
11位(18)	セーフティーネットの政治経済学	金子　勝	ちくま新書
12位(17)	なぜ日本は没落するか	森嶋通夫	岩波書店
	フランス資本主義と中央銀行	権上康男	東京大学出版会
14位(16)	転換期の日本経済	吉川　洋	岩波書店
	日本経済の真実	吉冨　勝	東洋経済新報社
16位(15)	稲盛和夫の実学	稲盛和夫	日本経済新聞社
	市場の役割 国家の役割	青木昌彦ほか編著	東洋経済新報社
18位(14)	明日を支配するもの	P・F・ドラッカー	ダイヤモンド社
	社会経済システムの制度分析	植村博恭ほか	名古屋大学出版会
20位(12)	近代日本金融史序説	石井寛治	東京大学出版会
	自己組織化と進化の論理	スチュアート・カウフマン	日本経済新聞社
	反グローバリズム	金子　勝	岩波書店
23位(11)	アダム・スミスの誤算	佐伯啓思	PHP新書
	「経済政策」はこれでよいか	伊東光晴	岩波書店
	コーポレート・ガバナンス入門	深尾光洋	ちくま新書
26位(10)	会社荘園制	S・M・ジャコービィ	北海道大学図書刊行会
	財政思想史	池上　惇	有斐閣
	なぜ国家は衰亡するのか	中西輝政	PHP新書
	マーケティング戦略論	上原征彦	有斐閣
30位(9)	関係性マーケティングの構図	和田充夫	有斐閣
	企業評価と戦略経営	トム・コープランドほか	日本経済新聞社
	競争から共創へ	清水博、前川正雄	岩波書店
	グローバリズムという妄想	ジョン・グレイ	日本経済新聞社
	現代日本経済論	奥村洋彦	東洋経済新報社
	日本的経営の興亡	徳丸壮也	ダイヤモンド社
	日本の人事査定	遠藤公嗣	ミネルヴァ書房

【アンケート調査の方法】全国70大学の経済学者、経営学者、エコノミストにアンケートを送付し、223人から回答を得た。98年11月～99年10月出版の経済書の中からベスト3を挙げてもらい、1位を3点、2位を2点、3位を1点として集計、合計点により順位づけした。なお1位得票では『不平等の再検討』と『日本の経済格差』が9票、『分配の経済学』が8票、『競争戦略論』7票という順になった。

られると思います。米欧では『米国経済論』、『英国経済論』といったような本はほとんど見あたりません。特定のトピックをテーマにしている。年金問題（九位の八田達夫ほか著『年金改革論』）、金融、コーポレート・ガバナンスといった本もありますが、環境、医療といった個別テーマは大問題なのに上位には上がってこない。

西村　新しくて面白いのは五位に推された『会社法の経済学』（三輪芳朗ほか編）。今後、他分野でもこうした共同研究が出てくると思う。

北村　経済学、会計学、法学ががっちり手を結んでいかないと研究は進んでいきませんね。

西村清彦●東京大学経済学部教授
北村行伸●一橋大学経済研究所助教授

M. ITO

西村　例えば、都市経済をやろうとすると、憲法の財産権の問題にまでいかざるをえない。

北村　ところが、以前はほとんど対話がなかった。論ならともかく経済政策には法律、会計学を踏まえたうえでの議論が必要とされています。

市場原理主義に対するアンチテーゼに評価

北村　金子さんの『反経済学』（七位）、『セーフティーネットの政治経済学』（一一位）など一連の著作は市場主義に対するアンチテーゼとして評価を得ている。九〇年代の長期不況をケインズの「有効需要の不足」で説明する『転換期の日本経済』（吉川洋著、一四位）もアンチのメッセージとして読まれています。

西村　その根底にあるのはやはり不平等感でしょうね。ただし、不平等はいけないとして、そもそも不平等とはなんなのか、不平等を解消するにはどれだけのコストがかかるか、という議論はこれからです。

北村　アマルティア・センは概念としていいことを言っているけれども、実現はむずかしい。

不平等を盾にして、政治家から「規制をもっと強化すべし」という話が出てきているのが現状です。せっかく新しい社会システムを構築しようという動きが始まったのに、振り出しに戻りかねない。

西村　もっとも困るのは、既得権者に都合のいいように利用されること。既得権益にがんじがらめの人たちを利することになる。

改めてベスト・オブ・経済書の顔ぶれを見ると、これだけ分配が問題になっているなら、日本人の国民性や社会心理などを含めて、全体を見通せるような本があってもよかった。

二〇〇〇年には、日本の労働市場で今、なにが起こっているか、日本人はどう変わっているか。それをきちんと分析した本が出てくることを期待したい。日本のこの分野の研究はかなりの蓄積があります。

北村　ランキングにはあがりませんでしたが、『ネットワーク経済』の法則』（K・シャピロほか著、IDCコミュニケーションズ）は、ミクロ経済学者によるなかなかしっかりした本です。来年はITと経済学の関連本がたくさん出てくると思います。

ベスト・オブ・経済書 出版社別ランキング

順位	出版社名	票数
1	岩波書店	101
2	東洋経済新報社	84
3	日本経済新聞社	69
4	東京大学出版会	52
5	有斐閣	39
6	ダイヤモンド社	37
7	PHP研究所	21
8	筑摩書房	18
9	中央経済社	13
10	新書館	11

著者インタビュー

法政大学経済学部教授●**金子 勝**

書店にはキャッシュフロー経営、国際会計基準などの本がうずたかく積まれている。皆さんも勉強されていることと思う。だが、本当にグローバル・スタンダードがいいやり方なのか、ちょっと立ち止まって考えてみてほしい。

今や雇用リストラは当たり前になった。日本企業がキャッシュフローを高めようとすればそうなる。しかし、本当にこれで日本経済は立ち直るのか。自分で自分の首を締めているのではないか。

日本の雇用システムは確かに欠点も多いが、それを変えるには順番というものがある。セーフティーネットを整え、安心して移動できるシステムを築き上げなければ、不安でしょうがない。主流経済学からはこのセーフティーネットの発想は出てこなかった。今のままでは日本でも米国社会のような分断化が進むばかりだ。私が『反経済学』などを通して申し上げたかったのは簡単に言えばこういうことである。

日本経済の停滞は長期的に続くと思う。問題は先送りされ、既得権益はずるずると温存されていく。だが、このままでもつはずがない。今後も具体的な提言をおこなっていくつもりだ。理論面でも企業論、ゲーム理論の再検討、文明論など多面的に取り組んでみたい。（談）

ベスト・オブ・経済書 著者別ランキング

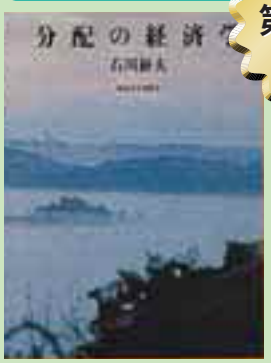
順位	著　者	票数
1	金子　勝	22
2	石川経夫	18
3	アマルティア・セン	17
4	橘木俊詔	14
5	吉川　洋	12
5	森嶋通夫	12
7	M・E・ポーター	10
7	ジョージ・ソロス	10
7	三輪芳朗ほか	10
7	武田晴人	10

第1位 分配の経済学

東京大学出版会　本体価格四八〇〇円

石川経夫著

41点



98年6月他界。47年生まれ。東京大学経済学部卒業・大学院経済学研究科教授。主な著書に『賃金二重構造の理論的検討』、『日本の所得と富の分配』（東京大学出版会）、『所得と富』（岩波書店）などがある。

推薦の言葉

●近代経済学派の「良心」を示す珠玉の一篇（磯谷明徳・九州大学経済学部助教授）

●著者の遺作であり、氏の研究業績が凝縮されていて示唆に富む（井上雅雄・立教大学経済学部教授）

●分配の問題をきちんとした枠組みで分析する（井堀利宏・東京大学経済学部教授）

●所得と富の分配に関するたいへん精緻な分析がなされている（植村博恭・名古屋大学経済学部助教授）

●貴重な書物（遠藤　薫・小樽商科大学商学部教授）

●学問的水準が極めて高い（片岡佑作・京都産業大学経済学部教授）

●今は亡き著者の教育者・研究者としての態度がにじみ出た好著。若い研究者は永遠の目標とすべきであろう（北村行伸・一橋大学経済研究所助教授）

●低成長のなか、日本国内の所得・資産の不平等は拡大している。そんな状況のもとで、この分野の第一人者であった著者の精緻な分析とメッセージは重要性をより増している（柴田　淳・大阪市立大学経済学部助教授）

●分配の問題にはもっと焦点が当てられていいと思う（下野恵子・名古屋市立大学経済学部付属経済研究所）

●日本を代表するマクロ経済学者である故石川教授の論文は、時代を超えて永遠の輝きを持っている（高橋知也・亜細亜大学経済学部助教授）

●労働経済学の分析に新しい視点を導入し、理論的にこれを明らかにした（武田晴人・東京大学大学院経済学研究科教授）

●いわば石川教授の遺書とも言える本書は、われわれ若い世代の経済学者に勇気と深い学究心を示唆してくれる。近年にはない「名著」である（竹田陽介・上智大学経済学部助教授）

●著者石川経夫先生を偲んで（徳井永次・信州大学経済学部教授）

●研究半ばにして世を去った石川教授の、ヒューマニズムのあふれた経済学に対する熱い思いが感じられる。この情熱をわれわれは忘れていないか、心しなければならない（西村清彦・東京大学経済学部教授）

●分配というこれまでの経済学が光をあててこなかった分野における、最新かつ包括的な研究書（野方　宏・静岡大学人文学部経済学科教授）

●鋭い分析（山田　稔・成城大学教授）

●自分の信ずるところに著者が進まれたことがよくわかる。数式の間から高い〝志〟と〝芸術性〟がにじみでている（脇田　成・東京都立大学経済学部助教授）

第2位 不平等の再検討

岩波書店　本体価格二六〇〇円

アマルティア・セン著
池本幸生ほか訳

38点

ケンブリッジ大学トリニティ・カレッジ学寮長。33年インド生まれ。98年ノーベル経済学賞受賞。主な邦訳書に『福祉の経済学』（岩波書店）、『合理的な愚か者－経済学＝倫理学的探究』（勁草書房）など。

推薦の言葉

●現代の市場経済のもとで、各国間はもとより先進国内での経済格差の問題が深刻化している。welfare の視点からそのメカニズムを冷徹に分析している（井上雅雄・立教大学経済学部教授）

●センの考え方がよくわかる論文集（金子　勝・法政大学経済学部教授）

●九八年ノーベル賞受賞以来、センの教授のリベラルな考え方がわが国でも広く受け入れられるようになったことを喜びたい（北村行伸・一橋大学経済研究所助教授）

●われわれにもう一度「経済学とはいかなる学問か」を考えさせてくれる書物（近藤真司・大阪府立大学経済学部助教授）

●斬新なアプローチによる知見が興味深い（齋藤堯幸・東京工業大学大学院・社会理工学研究科教授）

●センの「潜在能力の欠如が貧困である」という定義が特に優れている（佐藤谷敏・亜細亜大学経済学部教授）

●今後、翻訳予定の『貧困と飢餓』とあわせて、二一世紀社会をどう生きるかを考えるうえで貴重な示唆を与える。センの経済学を知るのによい（谷口洋志・中央大学経済学部教授）

●「平等＝善」という幻想の経済的コストを理解するのに有益（棚橋啓世・東京経済大学経営学部教授）

●貧困の分析に対して、達成された結果ではなく、潜在能力という点に着眼したのは見事である。センがインド出身でなかったらと考えると、着想に対する環境要因の重要性も再認識される（内藤嘉昭・奈良県立商科大学助教授）

●これ以外の著者の論文、書物も早く日本語で院生に読ませたい（中西一正・立命館大学経営学部教授）

●社会経済のあり方について突きつめていくと、倫理の問題に突き当たる。これについて深い洞察力を与えてくれる（新田　功・明治大学政治経済学部教授）

●人の潜在能力に着目するセンの自由と平等についての思想エッセンスが、一般向けに比較的平易に説かれている。所得、富の不平等にとどまらない多様な不平等の存在について深く考えさせられる（野口　真・専修大学経済学部教授）

●不平等の問題を考える際、何についての平等かについて焦点をあて、潜在能力という魅力的な概念を打ち出した（水谷重秋・南山大学経済学部教授）

●二一世紀の経済学の方向を示す（吉田文和・北海道大学経済学部教授）

●センの経済学への貢献が理解できる（脇村孝平・大阪市立大学経済学部教授）

第3位

36点

日本の経済格差

岩波新書　本体価格六六〇円

橘木俊詔著

京都大学経済研究所教授。43年生まれ。京都大助教授等を経て現職。著書に『個人貯蓄とライフサイクル』（日本経済新聞社）、『昇進の仕組み』（東洋経済新報社）、『ライフサイクルの経済学』（ちくま新書）など。

推薦の言葉

●日本経済の再生を目ざして、現在、さまざまな処方箋が示されている。しかし、現状の正しい把握なくしては、それらは単なる空理空論にすぎない。一億総中流幻想を打破した本書の荒業から、堅実な政策提言が始まることを期待したい（小田中直樹・東北大学経済学研究科助教授）

●五〇年代以降の経済格差の実態を分析、その是正への政策提言もおおむね妥当である（井上雅雄・立教大学経済学部教授）

●わが国では、この分野への正当な関心が払われていないなか、わかりやすいかたちで日本の分配問題を述べている（今喜典・青森公立大学経営経済学部教授）

●日本経済の「影の部分」をわかりやすく論理的に分析した。国際比較は視点も有益（牧井　徹・日本大学商学部教授）

●八〇年代以降の資本主義が再び所得配分の不平等度を強めたことを実証した（三和良一・青山学院大学経済学部教授）

●日本経済の不平等構造を適切なデータを使って説得的に説明している。日本は「戦後を通じて一度も福祉国家でなかった」という著者の問題定義は実に重みがある（野口　真・専修大学経済学部教授）

●日本社会が迎えつつある新たな、かつ大きなテーマについて明晰に分析（広井良典・千葉大学法経学部助教授）

●これまであまり表面に出て来なかったが重要な問題を見事に分析している（松川　滋・富山大学経済学部教授）

●いつもながらの手堅い実証研究である（松本有一・関西学院大学経済学部教授）

●これまでの常識を覆す実証分析。経済政策をどのように構想するか、その場合に踏まえておくべき業績（三島敏敬・静岡大学人文学部教授）

●不平等化の解決の試論として、消費税の累進化と税と社会保障の統合を展開した点を評価したい（室本誠二・日本大学経済学部教授）

●長年の研究成果が平易な言葉で語られる（森棟八夫・京都大学経済研究所教授）

著者インタビュー

日本は平等社会であると日本人のほとんどが信じてきた。日本社会は効率性と平等性のふたつを兼ね備えたユニークな資本主義社会であると、誇りをもってきた。

ところが、現実には、その平等主義が明らかに崩れ去りつつある。所得分配の変遷を過去100年の統計からじっくり追ってみると、とくにバブル経済期以降、急速に不平等化が進んでいることがわかる。効率性も同様に失われつつあり、日本は今、まさに二重苦に苛まれている。

加えて、日本社会においては不幸なことに、機会の均等までもが徐々に阻害されていることに気づいてほしい。親子間の遺産相続、世襲などによって、人生のスタートラインからハンディキャップがある。今の世の中は、頑張ろうとする人や有能な女性に十分な機会を与えていない。

では、日本はこれからどう進むべきか。日本は米国の後ばかり追いかけている。米国は機会均等と結果の不平等を認める社会である。しかし、北欧諸国のように機会と結果の平等の両方を求め、かつ豊かな国もあることを皆さんに知ってほしい、そしてどちらの道をいくべきか考えてほしい。

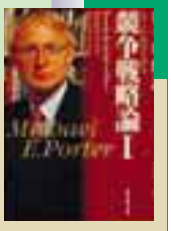
今後は、来年1月に『セーフティーネットの経済学』という本を上梓する予定だ。今の日本は、失敗した人への手当てが極めて不十分である。

効率性と公平性の両方を満たすような経済制度、経済政策が私の研究テーマである。いずれ税制や社会保障制度、労使関係などを含めて具体論を世に問いたい。累進消費税もそのひとつである。（談）

タテ
1/3AD

第4位 競争戦略論Ⅰ・Ⅱ

ダイヤモンド社　本体価格各二四〇〇円
マイケル・E・ポーター著
竹内弘高訳



25点

推薦の言葉

●経済地理学がかねて重要な研究対象としてきた産業集積現象を新しい視角から取り扱うことで、一般の読者に現代的意義を認識させた（加藤和暢・釧路公立大学経済学部経済学科教授）

●新しいグローバル競争下における競争優位の戦略のポイントを、凝縮化したモデルのもとで展開し、マクロ経済とミクロ経済との間の「スキ間」を埋める論理をとらえている（齋藤精一郎・立教大学社会学部教授）

●ポーター流経営戦略論の集大成として、八〇年代、九〇年代の代表的な理論枠組みを示している（柴田　高・東京経済大学経営学部助教授）

●競争戦略論の大家による集大成というべき著書。今後においては、良くも悪くもこの領域の基本モデルとなることだろう。原著のほうには掲載されていた「環境マネジメント」の章がなかったことは非常に残念に思う（田口竜也・徳島大学総合科学部助教授）

●経済学・経営学の枠をこえて、「企業」のよって立つ「競争力」の源泉について考えさせられる（西村清彦・東京大学経済学部教授）

●今さらながら、読み応えのある名著（西村順一・甲南大学経営学部教授）

●マイケル・ポーターの最新の研究を日本語で紹介。とりわけ、クラスター理論の紹介は初めてである（宮町良広・大分大学経済学部助教授）

●経営戦略において産業集積（クラスター）の存在が重要であることを初めて指摘した。日本における産業の東京、大阪への集中を問題視している（山崎　朗・九州大学経済学部助教授）

第5位 会社法の経済学

東京大学出版会　本体価格四八〇〇円
三輪芳朗、神田秀樹、柳川範之編

24点

推薦の言葉

●これまでにないアプローチによる経済論（大木登志枝・さくら総研環太平洋研究センター主任研究員）

●新しい分野の優れた学術書（奥　和義・関西大学商学部助教授）

●学際的な新しい研究分野を開拓した。経済学的アプローチの有効性、さらにはその限界を認識させてくれる刺激的な書物である（今　喜典・青森公立大学経営経済学部教授）

●「法と経済学」という研究分野はアメリカでは五〇年代から始まった。先進国アメリカから遅れること数十年、ようやく会社法という限られた分野ではあるが、アメリカに遜色のない水準の著作が生まれたといえる。数字音痴には数式がないのも喜ばしい（志谷匡史・神戸商科大学商経学部教授）

●アメリカでは法と経済学は大きな学問分野であり、多くの研究書がある。この動きは国際的な広がりを見せているが、日本ではそうではない。日本におけるこの分野の先駆書となった（中村萬哉・小樽商科大学商学部助教授）

●法と経済学の関係を明快に分析した出色の書だといえる。経済学者と経営学者の三年以上にわたる議論の成果（西村清彦・東京大学経済学部教授）

●わが国で最初の本格的な「法と経済学」に関する研究書（野方　宏・静岡大学人文学部経済学科教授）

●法律と経済学の学際的領域における、経済学の有用性を示している点が高く評価できる。今後のこの分野の重要性を認識させる意味においても、出版の意義は大きいと思う（和田佳之・滋賀大学経済学部助教授）

第6位 グローバル資本主義の危機

日本経済新聞社　本体価格一八〇〇円
ジョージ・ソロス著
大原　進訳

23点

推薦の言葉

●世紀末の妖怪・デリバティブも、現在の資本主義社会に必要だとの説得力がある（有馬敬則・滋賀大学経済学部教授）

●今や新古典派経済学に基づく世界経済の運営は危険。東アジアに始まった経済危機もグローバル資本主義と無縁ではない（石川元廣・東海総合研究所事務）

●金融システムのグローバリゼーションを臨場感を持って分析している（植村博恭・名古屋大学経済学部助教授）

●グローバル金融市場の破壊的な性格を明らかにし、警鐘を打ち鳴らしている（万田和夫・九州大学経済学部教授）

●単にヘッジファンドの総帥の投資哲学が語られているだけでなく、金融市場の新しい価格形成メカニズムが示唆されている（塩沢由典・大阪市立大学経済学部教授）

●危機回避策の提言をも含む第一級の経済学書。師ポパーの正統な継承者として自然科学と社会科学との違いから説き起こし、グローバルな開かれた社会への展望にまで説き及ぶ。ソロスにはこんな「もう一つの顔」もあったのだ（高橋洋児・静岡大学人文学部経済学科教授）

●当事者自身による痛烈な現代資本主義批判。ただし、自己弁明の箇所も（鶴田満彦・中央大学商学部教授）

●誤謬性・開かれた社会・相互規制（依存）をキーワードとし、カジノ資本主義化したグローバル経済の危険性を警告（長島誠一・東京経済大学経済学部教授）

●グローバル経済に対する批判は必ずしも左翼的なものではない。ソロスはポパー流の「開かれた社会」を代替案とする（橋本　努・北海道大学経済学部助教授）

●世界的金融システムの脆さを現場から論じた（長谷川聰哲・中央大学教授）

第7位 22点

ディジタル・エコノミー

東洋経済新報社　本体価格一八〇〇円

米国商務省著　室田泰弘訳

推薦の言葉

●情報化社会は新古典派経済に近づくと、簡単に片づけてしまえないほど、多くの論点があることを教えてくれる（辰巳憲一・学習院大学教授）

●デジタルエコノミーの進展をデータで適確に指摘している。日本企業のこの分野での取組みの遅れがよくわかる（加登　豊・神戸大学大学院教授）

●ITが経済にどのような影響を与えるかという本は散見されるが、そのなかでも事例を紹介しながらかつ体系的にまとめられており、好著（矢野裕児・流通経済大学助教授）

反経済学

新書館　本体価格二四〇〇円

金子　勝著

●いま一番元気な経済学者である。氏の論に対する賛否をこえて、だれもが一読すべき本（中西一正・立命館大学教授）

●現在の世界経済の混乱の一部は、誤った経済学のつくり出したもの。本書はそこに正面から切り込んでいる（塩沢由典・大阪市立大学教授）

●市場経済をめぐるさまざまな言説を批判的に考察した著書は、バブル経済期以降の日本経済の病弊の底流に「経済学」の不在と人間像の貧困を透視している（柳沢　遊・慶應義塾大学教授）

●市場（効率）か政府（公正）の対立図式を超えた新しい公共的システムのあり方を問う（谷本寛治・一橋大学教授）

●パワフルで知的エネルギーに満ち溢れた新しいセーフティネット論である（玉井金五・大阪市立大学教授）

第9位 19点

日本人の経済観念

岩波書店　本体価格二三〇〇円

武田晴人著

●本書の著者は日本人の日常的な経済生活を支える仕組みがどのように形成されてきたかを丹念に跡づけし、「グローバル・スタンダード」適用派の歴史像の誤りを正している（柳沢　遊・慶應義塾大学教授）

●日本的経営論、日本的労使関係、日本的商習慣に関するさまざまな謬見、錯覚を打ち砕く意欲作（山崎志郎・東京都立大学教授）

●経済・景気動向の中での株価動向を極めて正確に説明している点が類書に見られないほど貴重と感じる（宮智宣示七・産能大学大学院教授）

●日本の経済史研究の中に、民俗学など周辺学問領域の研究成果をとりこんで研究の新しい方向を提示した（長島修・立命館大学教授）

年金改革論

日本経済新聞社　本体価格四四〇〇円

八田達夫、小口登良著

●年金改革の方向を優れた計算分析で示している（井堀利宏・東京大学教授）

●近年、だれもが気になるトピックスの一つが年金問題であろう。その問題の所在と将来への展望を綿密に分析し、しかも現実的な政策的提言をした本書は、類書をはるかに凌駕している（池田憲隆・弘前大学助教授）

●年金についての国民の幻想を払拭するのに大いに力があるものと思われる。現実をよく見極めたうえで、とるべき対策を着実に実行することが肝心である（内野順雄・大分大学教授）

●直間比率の是正、所得税減税と消費税増税論が主流となるなかで、所得税中心型税制による年金改革論は興味深い（星野泉・明治大学助教授）

第11位 18点

セーフティーネットの政治経済学

ちくま新書　本体価格六六〇円

金子　勝著

●この著者の一連の仕事は、昨今の「市場原理主義」的風潮にもっとも鋭い批判と対案を提示したと思う。この本はそれ代表作ということで挙げておく（池田憲隆・弘前大学助教授）

●〈市場〉というものについての社会哲学的もしくは、倫理学的洞察に裏打ちされた著者のセーフティネット論は現実への切り込みも鋭い（脇村孝平・大阪市立大学教授）

●主流派（新古典派）経済学を批判するだけでなく、セーフティネットの形成という対案を提示（二木立・日本福祉大学教授）

●現代日本の閉塞状況の原因解明と打開策を明快に提示（中谷武雄・徳島大学教授）

第12位 17点

なぜ日本は沒落するか

岩波書店　本体価格一六〇〇円

森嶋通夫著

●イギリスで長く生活された碩学の警世の書にして優れた日本論（内野順雄・大分大学教授）

●文明論の立場から日本の現状を解明した。わが日本の経済学者はこれまで非常に狭い視点からしか見てこなかったことがわかる（奥村　宏・中央大学教授）

●教育の荒廃と北東アジアの地域統合が論理的にきれているが、日本の長期戦略の欠如に警鐘を鳴らしている点がよい（金子勝・法政大学教授）

フランス資本主義と中央銀行

東京大学出版会　本体価格一万円

権上康男著

●フランスを対象として、戦後資本主義を支える中央銀行を軸とする組織化された金融システムの形成過程を実証的に解明し、戦後資本主義研究に光を与える労作（大石嘉一郎・明治学院大学教授）

●本書は、金本位制から管理通貨制への移行を、古典的資本主義と金本位制への執着がとりわけ強かったフランスを素材に、中央銀行の官僚機構深部における模索と構想と立案と政策実施の諸過程に光をあてて繊細に解明した。経済史研究の真骨頂が味読できる（雨宮昭彦・千葉大学教授）

●久々に見る本格的研究。しかも、フランス銀行制度の研究は未開拓分野であるので、この本が出版された意義は大きい（岡田和喜・日本大学教授）

第14位 16点

転換期の日本経済

岩波書店　本体価格二三〇〇円

吉川　洋著

●構造変化のありようと方向性を時流に流されることなく冷静かつ実証的に論じた説得力をもつ書（藤江昌嗣・明治大学教授）

●未曾有の転換期にある日本経済において、まったく緊急性のない経済政策の「指南」が多いなかで、経済論理に基づき、日本経済のあるべき姿を模索した「良質の権威」と言える（竹田陽介・上智大学助教授）

●たいへん論争的な本。賛成する部分もあるが、その逆もある。主張がはっきりしていて読みやすい（下野恵子・名古屋市立大学

経済学者・経営学者・エコノミスト220人が選んだ

1999年 年間ベスト・オブ・経済書

経済研究所

日本経済の真実

東洋経済新報社　本体価格二〇〇〇円

吉冨　勝著

●九〇年代の不況の原因を、マクロ経済的に分析したうえで、本質的な問題を企業統治に求めている点が共感できる（池田信夫・国際大学グローバル・コミュニケーション・センター教授）

●日本経済　その関連のアジア経済の金融危機を現代経済分析、現代経済政策の理論からデータに即して見事に説明している（諏訪貞夫・早稲田大学教授）

●日本経済の現実を詳しく解明した本。いわゆる官庁エコノミストから離れた人の分析として評価する（奥村宏・中央大学教授）

第16位　15点

稲盛和夫の実学

日本経済新聞社　本体価格一二〇〇円

稲盛和夫著

●「経営のための会計」の重要性が平易に、しかも実践的に説かれている。京セラ稲盛さんの三位一体の経営、京セラグループ躍進の神髄がよく理解できる。経営者並びに管理職にとって必読の書（原田和明・三和総合研究所取締役理事）

●すべての経営者がこうした意識を持っていたなら、わが国の会計情報は国際的にもっと信用されることだろう。経営者に意識改革を迫る一冊である（蟹江章・北海道大学助教授）

市場の役割　国家の役割

東洋経済新報社　本体価格二五〇〇円

青木昌彦、奥野正寛　岡崎哲二編著

●今日、公と民の役割分担や守備範囲の議論が国、地方レベルを問わず行なわれているなかで、極めて示唆的な内容を持っている（佐々木　弘・神戸大学大学院教授）

●日本の経済システムを理解するうえで新しい視点を提供している。規制緩和と制度改革を実行するときに必読すべき（野村宗訓・[illegible]）

第18位　14点

明日を支配するもの

ダイヤモンド社　本体価格二二〇〇円

ピーター・F・ドラッカー著

上田惇生訳

●ドラッカーは二一世紀を〝乱気流の時代〟と位置づけ、変革の担い手にならないと、国家・企業は生き残れないと説く。氏の主張は現在の日本経済にピタリとあてはまる（高木　勝・明治大学教授）

●ビジネスは明日に向かっての行動である。そのための準備にこの本は不可欠だ。J・A・シュンペーターとともにドラッカーは今世紀の巨匠だ（厚東偉介・早稲田大教授）

社会経済システムの制度分析

名古屋大学出版会　本体価格三五〇〇円

植村博恭、磯谷明徳　海老塚　明著

●社会経済システムの構造分析をミクロ、マクロの相互関係からとらえようとした労作（谷本寛治・一橋大学教授）

●いわゆる「制度派」経済学の理解に有効な一書。混迷を深める経済学がどこへ行こうとするのか。一つの方向を見定めようとしているところが興味深い（花田洋一郎・西南学院大学助教授）

アンケートにご協力いただいた方々　（敬称略、五十音順）

青山茂樹、秋元英一、浅井良夫、浅羽　茂、浅羽良昌、安部悦生、雨宮昭彦、荒木長照、有馬敏則、生越利昭、池田憲隆、池田信夫、石　弘光、石井信之、石川元廣、石崎忠司、石田　浩、泉　武夫、石橋太郎、石原俊時、磯谷明徳、井上雅雄、茨木　智、井堀利宏、今井雅和、岩成和子、上野継藤、植村利男、植村博恭、牛島俊明、宇田川　博、内野順雄、浦井　憲、榎本　悟、遠藤　薫、遠藤公嗣、遠藤久夫、大石嘉一郎、大木登志枝、大崎美泉、太田　肇、太田　充、太田雅晴、大西　広、大野和美、大羽宏一、大矢繁夫、岡田和喜、岡田裕之、奥　和義、奥村　宏、小沢康英、小田切宏之、小田中直樹、小野五郎、御崎加代子、柿本寿明、加来祥男、可児島達夫、春日淳一、片岡佑作、刀田和夫、鹿児島治利、加登　豊、加藤　寛、加藤和暢、門脇延行、蟹江　章、金子　勝、川北　稔、川越敏司、北村行伸、清成忠男、木良横敏雄、栗木　契、香田正人、厚東偉介、小谷正守、後藤　晃、後藤康夫、小林　薫、小林　均、小山明宏、今　喜典、近藤真司、齋藤精一郎、齋藤堯幸、酒井正三郎、坂本恒夫、桜井　徹、佐々木恒男、佐々木利廣、佐々木　弘、佐々木信彰、佐竹元一郎、佐藤公敏、佐藤俊雄、佐藤保久、佐藤良一、塩沢由典、塩次喜代明、志谷匡史、室本誠二、篠原総一、柴　健次、柴田淳、柴田　高、清水　聡、清水　孝、下野恵子、祝迫得夫、宿南達志郎、杉野幹夫、杉原　薫、鈴木多加史、鈴木智弘、須永　隆、須永徳武、角野　浩、諏訪貞夫、関口定一、千田純一、高木　勝、高橋俊夫、高橋知也、高橋洋児、滝川好夫、武田晴人、竹田陽介、竹村和久、竹村正明、多田正仁、辰巳憲一、立脇和夫、田中　洋、棚橋啓世、谷口洋志、谷本寛治、玉井金五、鶴田満彦、出口竜也、天野良雄、洞口治夫、徳井丞次、鳥谷一生、内藤嘉昭、長島　修、長島誠一、中條祐介、中谷武雄、仲田正機、中西一正、中野　誠、永原裕一、中村竜哉、西村清彦、西村順二、西山賢一、新田　功、野方　宏、野口　真、野村宗訓、伯井泰彦、橋本　努、長谷川聡哲、長谷川　勉、長谷川憲一、服部素子、花田洋一郎、原田和明、原田三喜雄、原田行男、廣井良典、福光　寛、藤井隆至、藤江昌嗣、藤村和弘、二木　立、古川俊一、星野　泉、堀　敬一、堀江正之、松川　滋、松下　滋、松波淳也、松本有一、水谷重秋、三富紀敬、宮智宗七、宮町良広、三和良一、村上良三、村田安雄、森岡　裕、森棟公夫、諸富　徹、安井修二、柳沢　遊、矢野裕児、山下壽文、山根　学、山崎　朗、山崎志郎、山田　稔、山田昌孝、山田經三、山本　繁、吉井　弘、吉田文和、吉村典久、余田拓郎、脇田　成、脇村孝平、和田佳之、渡辺　茂